



1962年に始まった「あなたの愛の手を」。近く掲載2300回を迎える

新しい家庭と結ぶ懸け橋に

つなぐ「愛の手」

里親ケースワーカーのまなざし ①

連載58年、子どもたち紹介

実親と暮らすことの難しい子どもを里親につなげる「愛の手運動」。里親月間(10月)にちなみ、多くの人に里親制度への理解を深めてもらおうと、家庭養護促進協会の主任ケースワーカー米沢晋子さんが原稿を寄せた。

本紙月曜掲載「あなたの愛の手を」は今年、58年を迎えました。里親、養親を求める子どもたちを紹介し、その里親を求めている「愛の手運動」。その推進母体が家庭養護促進協会

で、神戸と大阪に事務所があります。この運動は子どもと里親

とをつなぐ懸け橋の役割を果たしてきました。これまで、この運動を通して家庭に迎えられた子どもは2500人を超えました。

「愛の手」の記事に紹介され、里親に出会った女性は今ではもう社会人。「あの記事を見てくれたから、里親に出会うことができた

「愛の手」はもう一つ、里親制度を広く世の中に知らせているという役割も果たしています。

子どもの頃に親と一緒に「愛の手」を読んでいた男性は、結婚後、子どもに恵まれませんでした。しかし、里親として子どもを育てることができると知っていた彼は、妻にその話をしました。夫妻とも思いは一致。2人は養育の申し込みをしました。

十数年前からは、里親を求める子どもたちの中に障害や病気があり、その対応

から、今日の自分がある」と話してくれました。里親から暮らしの工夫や生きる知恵を学ぶことができ、子育てで困ったら「お母さん(里親)だったらこんなときどうするのかな」とよく思い浮かべるといいます。

女性は、最近の幼い子どもへの虐待死事件を見聞きし、自分の実父が「私の命を守るためにしかるべき所に援助を求め、手放してくれたから今日がある」と思うそうです。大人になった今、「子どもの養育に困ったときは手助けを求めている。それを親が理解することも大切なんだ」と考えられるようになりました。

愛の手運動から先輩里親の姿を知り、多様なニーズのある子どもを受け入れてくれる里親は少しずつ増えてきています。そんな里親に出会い、人間の力と優しさに勇気づけられています。

◇次回は24日に掲載します。